HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	新渡戸稲造の朝鮮亡国論
Author(s)	権, 錫永
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 126, 37(右)-60(右)
Issue Date	2008-11-28
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34982
Type	bulletin (article)
File Information	KEN.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

新渡戸稲造の朝鮮亡国論

権　錫　永

はじめに

帝国主義の時代に地理的な境界を越えてなされた他者同士の出会いにおいて、「認識する」ことにはどのような意味があっただろうか。コロンブスの新大陸発見の時代を描いたツヴェスタン・トドロフの『他者の記号学』は、他者を認識する力が、他者同士の支配関係と密接につながっていることを示唆する。(1) 越境者はその地の文化や人々を観察し、認識する。かれらの中にあるのは、無性に認識したいと欲する気持ち、トドロフの言葉を借りるならば、「認識への渇き」である。(2) だが、それに突き動かされてなされる他者認識は必ずしも正しい理解を意味しない。そこに生み出された他者をめぐる数々の物語は政治性を強く帯びたものとなる。もちろん、己を語る場合も同様である。そのような問題に対する関心についてエドワード・サイードは『文化と帝国主義』の中で、次のように述べた。

物語こそ、私の議論のかなめであり、わたしの基本的な観点とは、探検家や小説家が世界の未知な領域について語ることの核心には、物語がひそむこと、また物語は、植民地化された人びとが、みずからのアイデンティティと自らの歴史の存在を主張するときに使う手段ともなるということである。（略）誰がその土地を所有し、誰がそこに定住し耕作するのか、誰が土地を存続させるのか、誰が土地を奪い返すのか、誰がいま土地の未来を計画するのかが問題になるとき、こうした問題に考察をくわえ、異議をとなえ、また一時的であれ結論をもたらすのは物語なのである。[3]（傍点――原文）

己や他者をどのように認識し位置づけるかは、両者の政治的関係において決定的に重要なのだ。

日本人の朝鮮・朝鮮人認識がきわめて厳しいものであったことは、これまでの研究が詳細に論じているところである。[4]本稿で取り上げる朝鮮亡国論がそのような認識と不可分の関係にあることは言うまでもない。それは、朝鮮を自ら亡んだ（または亡びつつある）国、従ってそのまま自立して一国を経営していく能力のない国として表象してしまう。それはまさに、両国の政治的関係に「結論」をもたらそうとする「物語」として、日露戦争直後の日本帝国主義を支えるものであったと考えられる。本稿では、併合前の段階で、日本人が社会的・文化的状況から朝鮮を「亡国」または「死骸」・「死せる」国と断定した例に注目し、朝鮮が亡国となった、または、亡国化しつつある原因をもっぱらその社会内部に求める――当時のパワー・ポリティックスを一因として取り上げることのない――それらの言説を朝鮮亡国論（以下、亡国論）と呼ぶこととする。そして、亡国論全体について言及しつつ、その代表的なものとして新渡戸稲造が一九〇六年の朝鮮旅行で書いた「亡国[5]」、「枯死国朝鮮[6]」を取り上げる。

朝鮮の遅れを論じたものや亡国論は、文化をめぐる序列化とか「停滞史観[7]」、または「ウルトラ停滞社会観[8]」と評さ

れる。ここではこの見方の根源にかかわる考え方を検討することから始めたい。新渡戸の亡国論を評した言葉である「ウルトラ停滞社会観」は、朝鮮の遅れを論じたものを批判するときに用いられる「停滞史観」という見方に連なるものである。明言されないこともあって一概には言えないが、こうした見方には「支配の正当化のための嘘だ！」というようなニュアンスの批判が込められていることが多い。それがはっきり現れている新渡戸批判として、ある報告書では、新渡戸稲造が「急進的で野心的な「日本帝国本位」の植民地官僚の勢力に立って行動した」とされ、さらに次のように指摘されている。[9]「新渡戸の行動は、すぐれて帝国主義的であるが、この時、どうして上に掲げた「亡国」や「枯死国朝鮮」のような極端に偏った随想を記したか、背景を示していよう。自力で発展できないだけでなく、「亡国」「消滅する運命」の韓国というイメージが、「日本帝国本位」の植民地政策を主張するために必要だったのである。」これは新渡戸の認識上の非――自然さ＝作為性に対する批判である。筆者の立場も同じであり、この点は、本稿において再確認しようとする重要な問題の一つでもある。

だが、問題は単純ではない。ジョージ・オーシロは新渡戸の亡国論に触れて、「初めて朝鮮を訪れたとき、稲造は、朝鮮の社会は腐敗し、道徳観を喪失してしまっていると感じ」たと述べている。根拠は示されておらず、一見何の変哲もない見解にみえるが、これは新渡戸の認識に作為性を認めないという点で、「支配の正当化のための嘘だ！」というニュアンスの批判と真っ向から対立する。こういった新渡戸擁護ともとれる論調は、亡国論（および朝鮮の遅れを論じた言説）を作為的なものとする見解を許容しない。このようなずれに注目すれば、作為性・無作為性の問題は、今一度検証されなければならない課題として見えてくる。

さて、植民地をめぐる認識の作為性と無作為性の両方の可能性を認めなければならないとすれば、植民地認識に対

する我々の批判のトーンも変わらざるを得ない。この難題に一定の答えを導き出すためには、次のような、明確な批判のパースペクティブが必要になる。すでに明らかなように、亡国論や朝鮮の遅れを論じた言説に過ちがあるとすれば、それに対しては、二通りの批判があり得る。一つは、前述した、認識上の非――自然さ＝作為性に対する批判（倫理的批判）、もう一つは、作為のない自然な認識ではあるものの、言説行為者が間違った文化の価値体系を持っていたことに対する批判（知性のレベルでの批判）である。問題は後者である。ある言説が支配の正当化の機能を担ったとしても、その言説行為者の中にすでにある価値体系が存在し、異文化理解・認識のあり方がそれによって決定づけられているとすれば、倫理性に基づく批判はしにくくなる。[10] 場合によっては、時代的特性をもって免罪符を与えることもあろう。批判のトーンが変わらざるを得ないゆえんである。

とすれば、新渡戸の認識上の自然さ＝無作為性を認めるかどうかが重要であることは言うまでもなく、我々の課題とすべきものも自ずと明らかであろう。本稿では、新渡戸の亡国論についてその作為性（もしくは無作為性）を検証し、同時代における位置づけを行う。

分析に際しては、以上のように、新渡戸およびその他の亡国論者[11]の眼には併合前の朝鮮の社会的・文化的状況が、本当に死んだ国、亡国として映った可能性を認めること、または外国人の誰の眼にもそう見えるほどに、朝鮮の状況がまさに亡国の状態だった可能性を認めることを出発点としている。そして、新渡戸の亡国論の検証と位置づけのために、次の三つの方法をとる。第一に、同時代の日本の亡国論一般とのかかわりを検討する。第二に、欧米の人々の朝鮮論の質を必要に応じて比較検討し、亡国論の有無を確認することで、[12] 新渡戸の亡国論（および日本の亡国論一般）がもつ意味を考える。第三に、亡国論にかかわる新渡戸の思想構造を考察する。

一　罵倒される朝鮮

まずいくつかの朝鮮亡国論を確認し、欧米の朝鮮論と大まかに比較検討したい。この作業は新渡戸の亡国論がもつ一般的な性格と特性の両方を浮き彫りにすることになるはずである。

管見の範囲で、朝鮮が亡国であると論じた最初の例は、ジャーナリストの末永純一郎が一八九三年に書いた「朝鮮の現制竝日本との関係」[13]である。末永は、朝鮮は「脈が絶え」た「死骸」である、その「神経は何時しか死んで仕舞て居る」、とした上でその原因について述べている。末永の場合の特徴は総合的な観点にある。朝鮮が一つの有機体としての「死骸」であること――従って、それぞれの細部の器官も死んでいるということ――を明言したからだけでなく、「死骸」となってしまった原因についての説明からみてもそうである。興味深いのは、末永の場合は朝鮮の地理的条件（大国の間にはさまれていること）と気候、そして豊臣秀吉の朝鮮出兵という歴史的な事象を重視している点である。彼によれば、「遊惰」という朝鮮人の気性は、この戦争によってすべてを破壊されたことに起因すると言う。「亡国」化の原因を地理・気候という自然的要因と外的要因（もしくは歴史的要因）に求めたこの例が、亡国論の原型とは言わないまでも、それに近い意味を持っていたことは想像に難くない。しかし、日露戦争以降の亡国論では[14]、これらが朝鮮の「死」の原因として挙げられることはなく、もっぱら、既定の事実としての朝鮮の「死」の原因を、社会内から細部にわたって探し求める方向がとられた。

次に引用する朝鮮論は、朝鮮のほとんどあらゆる社会的・文化的要素を「滅亡」の原因として並べ立てたものであ

る（原文がきちんと結ばれていないため、羅列だけの引用になることをことわっておきたい）。

韓国の滅亡は綱巾にて頭部を緊縮して頭痛を起こすこと、それが慣者となりて知覚神経を頓摩して失神忘却の徴候を現し、延て愚昧に墜入ること、早婚して進取の気風消摩すること、温突（オンドル）にて暖を取るため炬燵的国民となりて、怠惰に流るゝこと、老幼の別を厳にし小児に圧制を加へ、人に屈服せしむることを甘ぜしむること、（略）名誉心乏しく人に恥辱を受くるも呑気至極にして天下泰平なること、不潔と粗衣粗食を甘んずること（略）[15]

（振り仮名――引用者）

要するに、朝鮮はこういった様々な要素のために「滅亡」した――もしくは「滅亡」しつつある――というわけである。中でも日本人が当時よく取り上げたのは、早婚の習慣と朝鮮の暖房システムであるオンドルであった。しかも、これから見るように、早婚とオンドルはいずれも人間の精神と重要な関係にあるものとされていた。その意味で、ここで、早婚が「進取の気風消摩」につながるものとされていることや、オンドルが「炬燵的国民」・「怠惰」といった言葉につながっていることは、決して不思議ではない。まず、早婚をめぐる問題を見てみよう。例えば、「朝鮮人の無気力」や「意気地の無」さは「早婚の弊」であると言われたが[16]、その理由は、早く結婚させてしまうために、「子供の内は怜悧な者も、結婚後はボンヤリして仕舞う」からだと言う[17]。「韓国の滅亡」の原因として挙げられたものは、そのほとんどが首を傾げたくなるようなものばかりだが、早婚にしてもそのような印象は拭えない。確かに、早婚の習慣が異様に思われたり、啓蒙の視点から「改良」すべきものとして取り上げられることは十分に考えられる。

では、欧米の宣教師や旅行者たちは早婚についてどのように記したであろうか。イギリス人の旅行家・A. H. サビジ-ランドアーは、朝鮮の早婚した少年・少女について、次のように記した。

だが、結婚式を挙げたからといってそのカップルが本当の意味で夫婦になったと見ることはできない。というのは、世間の人々の目には夫と妻であっても、その二人は思春期に至るまでは一緒に暮らさないのである。

すなわち、六、七年間の結婚生活は、ただ名目上のものであるため、実は我々の「婚約」に当たるのである。それでも、彼がどんなに幼くても、結婚した男子として当然為すべき義務がある。彼はどんなに幼くても、結婚した瞬間からは大人になったわけなので、もっぱら大人たちと交わるようにしなければならない。チョンガー時代に同じ年頃の友達とこまを回し、一緒に走り回って遊んだ、あらゆる楽しみを忘れ、彼はもう年取った大人のように、大人しく振る舞わなければならない。[18]

また、イザベラ・バードは、結婚によって一人の「少年花婿」が「〈青二才〉から〈ひとかどの人物〉になる」のだとし、次のように述べる。[19]「十歳か十二歳の少年は、その親がなんらかの理由で、身を固めた事態や望ましい結合を見たい、と願う時、例外なく結婚する。こうしてこの少年花婿の黄色いつば付き帽子と、桃色や青色の外套と、未遂の威厳が都市の風物のなかに見られるのである。」朝鮮の結婚制度や社会の中での女性の位置などに対するイザベラ・バードの見方には批判や皮肉が感じられるが、あくまでもそれは穏やかさを維持しており、早婚をめぐっても同じである。ここで重要なのは、欧米の人々が早婚について批判的に書くことはあっても、それを「滅亡」・「亡国」と結びつけるようなことをしなかったばかりでなく、質的にも、いわば穏やかで洗練された文化批評の態度を維持していることである。その点で、日本人の場合と大きく異なる。

次は、オンドルについてみてみよう。オンドルをめぐっては、先の引用文の他にも「「オンドル」亡国論」なるものがあった。それは「改良」を念頭において唱えるものとされているが、それでも、先に引用した、オンドルのために

「炬燵的国民」となり、そのために朝鮮が滅亡した／滅亡するという見方と十分に呼応している。和田義睦（東京帝国大学工学博士）によれば[20]、オンドルは二つの意味で有害である。まず、「「オンドル」の燃料が生活費の七八分を占めている」から経済的に「有害」、とされる。もう一つは、「健康上」の「有害」性である。

冬期中韓人の家は此の「オンドル」の熱を保つ為に二三重に障子などで窓を閉切つて、全く息ぬきがないといふ有様で、（略）憲兵や巡査が冬期中韓人の家に宿して窒息したといふ話を聞くことは啻二三のみではありません。（略）私は「オンドル」亡国論を唱へて、諸君と共に之が改良を謀らんことを切望するのであります。不慣れな人が息苦しさを感じることは考えられるが、「窒息」とは明らかに誇張であろう。気密性が高くない当時の家屋で窒息は考えにくく、のちに在朝日本人によって行われた様々なオンドル研究においても、そのような事例が報告されたり、憂慮されたことはない。

和田はさらに続けて、朝鮮人の「無気力、小胆、遊惰」をその特徴として挙げた上で、次のように述べる。「オンドルは韓人を無気力にし、怠惰にした大原因であると考へます。寒気酷烈の時もまたかのオンドルの中に臥て暮らして、寒気の為めに刺撃せらるゝこともなく、智徳開発の教育を受けるといふではなく、毎日寝て煙草を吸つて暮らしてゐるのであります。」オンドルが人間の精神をだめにするという見方は多く見られ、ある程度共通認識があったようである[21]。

多くの欧米の人々もオンドルについて書いているが、評価は日本人の場合と大きく異なる。長年外交官として朝鮮に滞在したH.N.アレンは、次のように述べる。「一日二回ご飯を炊くだけで部屋が暖かい。この点では、朝鮮人は隣の国の人たちより優れている。なぜなら、日本の家屋は有害なくらいに寒く、その反面、中国人たちは冬の酷寒でも

決して暖かさを知らないからだ。[22]」またイザベラ・バードは、「十歳の少年が運べる量の枯葉や雑草で、二部屋を華氏七十度［摂氏二十一度］以上に、十二時間に亘って保てる」オンドルは、「全ての暖房方法のなかでもっとも経済的なもの」であると述べた。ただ、旅人や驢馬のための調理によって熱くなりすぎた部屋で耐え難い思いをすることもあった。[23] ロシア人の朝鮮旅行記を集めた『朝鮮旅行記』でも、オンドルの仕組みを詳細に記述し、その独創性と経済性を評価する一方、「過熱気味の床を耐え難く熱いと感ずる機会があった」と記している。[24]

欧米の人々のオンドル批評では、ほぼ共通して、換気の面と熱すぎになることがあるという点が短所として指摘されてはいたものの、経済性や便利さなどの面で暖房としての優秀さが高く評価されていた。その点、オンドルに対して厳しく、さらにはそれをもって朝鮮の「亡国」たるゆえんや「怠惰」な朝鮮人を論じた日本人のオンドル批評との質の違いは明らかである。

最後に、儒教にかかわる亡国論について簡単に言及しておく。

何処の国でも将に亡びんとする時には、凡ての物事が其の実を失つて名ばかり残り、形式ばかり存するものだ。今更加藤高明の形式亡国論に驚嘆するではないが、今の朝鮮は全く其の通りで、何でもかでも形式づくめ、形式全盛時代とでも云ふべきものである。（略）

就中馬鹿〳〵しいのは、親の命日の「アイゴー」である。[25]

そして続けて、葬礼や命日におけるこの「アイゴー」（＝慟哭）は心がこもらず、「形式」だけのものになっていると言う。加藤高明の「形式亡国論」の原典を探し当てるには至らなかったが、「将に亡びんとする」朝鮮を「形式全盛時代」という側面から論じているこの引用文自体が「形式亡国論」であると言えよう。もう一つ、朝鮮近代文学の先

駆者とされる李光洙が、「朝鮮を滅ぼしたのは礼なり」とした「吉田博士」の「虚礼亡国論」に言及しているが、それは「形式亡国論」とも通じるものがあろう。[26]

儒教にかかわるこの類の亡国論も、やはり欧米の人々の朝鮮論にはみられないものである。朝鮮の「祖先崇拝」に関するイザベラ・バードの記述は、亡国論と対照をなしていて興味深い。イザベラ・バードは、朝鮮の「祖先崇拝」は「先祖の精霊が子孫に害をなすかも知れない、という恐怖のためであって、親孝行の所為ではないようである」とし、この「信仰」は、「大晦日に粗末なあばら屋で先祖に捧げるご馳走が並べられるのと同様に、行幸の高価な輝きの原動力にもなっている」（傍点――原文）と、祖先をまつる行為について皮肉を述べている。[27] ただ彼女の場合、朝鮮の「祖先崇拝」が、「自然の力に対する臆病で迷信的な恐怖の結果」として「宗教の代わり」になっているとの判断を下している。ここで確認したいのは、彼女の判断の是非ではなく、朝鮮の社会的現象に対する理性的な態度である。

以上みてきたように、欧米の人々は早婚、オンドル、儒教をめぐって朝鮮を亡国として論じることはなかった。断定は難しいが、それはおそらくその他のどの文化的事象に関しても言えることであろう。また、朝鮮文化のどれを取り上げても、欧米の人々の方がはるかに好意的であったことも見逃せない――もちろん、それが必ずしもよき理解者であることを意味するわけではない――。ましてや、彼らによって、次のような極端な「亡国」論は書かれるはずもなかった。

英雄なく、革命なく、希望なく、幸福なく、消極的平和の間に酔生夢死す（。）国民自から作為せる文明なく発達なきも異むに足らむや、秦漢の亡命団と南方外侵の流民族とが扶植したる新羅の文明は、半島国民文化の絶頂也、新羅以来復新羅の文物なく、社会の色沢なく、歓喜なく、発達なし、半文半野の間に滅亡的社会を為す、半

島国民三千年の事業は、唯此滅亡的社会の創建あるのみ、（略）半島国民は曽て発達進歩、繁栄の何者たるかを知らざる也。

消極的快楽、欲望的服従の外を知らざる半島国民は、世界最劣等の仙人也、其境遇は牛馬を去ること遠からず、彼等は如何なる正理あるも之れを官僚に向つて反訴するの能力なく、（略）

要するに半島国民は先天的亡国の民也。独立たるの天賦を有せざるもの也[28]。

以上検討してきたことを整理してみよう。日本人であれ欧米の人であれ、外国人が朝鮮で珍しく感じたり、興味を引かれる物・習慣・風俗はある程度共通している。また、欧米の人々に朝鮮の文化や社会状況がしばしば否定的に見られることがあったことも確かであり、それが日本人の朝鮮論同様、朝鮮の暗黒性・未開性を暴き立てる役割を担うこともあったであろう。しかし、併合前の日本人の朝鮮論はえてして口汚い罵倒と言ってもいいような論調であり、その延長線上で、もしくはその極論として朝鮮亡国が論じられたのに対して、欧米の人々の場合は、多分に客観的で穏やかで、洗練された文化批評の性質を維持していた。

二　新渡戸稲造の亡国論

口汚く罵倒するような論調の日本人の朝鮮論の中にあって、「ロマン化」され[29]、同情を帯びた、一見穏やかで洗練された新渡戸の亡国論は趣が違う。ある意味では、新渡戸はむしろ欧米の人々に近い面もある。「亡国」の中で新渡戸は、朝鮮の荒れた森林とやせた田に言及した後、次のように述べる。

最も悲しむべきは、民力銷耗してまた余す所無きことなり。努力の源は涸れぬ。彼等を勤労せしめんにも既に刺激無し。男は白衣を着て座し、長煙管を喫し、昔を夢みて、今を思はず、後に望む所無し。唯だ飢来らば、乏しき食を得んが為に蠢動するのみ。女、彼の憫むべき女――人生の労苦は、到る処彼等の肩上に最も重く、常に家族の白衣を打ち又た滌ぐ。而して又た女児の如く美しき顔せる少年は、壮夫もなほ耐へざる重荷を負戴す。

今夕予、柳樹の下に沈吟すれば、覚えず悲感の予を襲ふあり。(略)風はしかく乾けり、何すれぞ我眼、涙に湿ふことあらんや。大気はしかく清朗なり、何者か予の心を重苦ならしめんや。

多くの朝鮮論に見られる軽蔑や罵倒の代わりに、新渡戸は「亡国」朝鮮・朝鮮人への同情として、涙を流して見せた。だが、前述したように、欧米の朝鮮論には「亡国」やその類の言葉は見られない。それだけでなく、新渡戸の「朝鮮人」ほどの悲劇的な朝鮮人も描かれてはいない。もう一つ重要なのは、前述のジョージ・オーシロの見方とは異なり、新渡戸が朝鮮を「亡国」と規定したのは、朝鮮旅行をきっかけとしてではなかったという点である。すでに一年ほど前に、次のように書いていたのである。「政治的本能を欠き、経済的常識に乏しく、知識的野心無き、彼の薄弱なる女性的国民は、褐色日本人の重荷となれり。吾人は死せる此一国を復活せしめんが為に経営辛苦する所無くんばあるべからず[30]」。

朝鮮へ旅立つ前から新渡戸はこのような朝鮮観を示していたのである。この問題について少し考えてみよう。筆者が考えるには、新渡戸にあっては、支配のためであれ救済のためであれ、朝鮮は「死せる」国、「亡国」として表象される必要があった。どのような理由によるのかを性急に割り切るつもりはないが、少なくともかれが、先の引用文に見られるような救済を――つまり、支配ではなく――純粋に志向したと見ることはできない。なぜなら、かれは広い

意味での膨張論者でもあったからだ。それは南進論に近い「桃太郎の昔噺」[31]を見ても明らかだが、ここでは「日本帝国の膨張」を見てみよう[32]。全体的に見て、この論説は日本膨張論として新渡戸の重要な一面を表している。彼は、まず領土上の膨張の困難な状況を説き、「海上権の拡張」も「領土の拡張と異ならず」とし、もちろん「水面」のみならず「上陸」による領土の拡張も、「不正なる手段に依らず」に「実行し得べし」としている。さらに、これを朝鮮との関係で検討してみよう。大変興味深いのは、新渡戸がまず、朝鮮の独立を約束した日本＝「君子国」としては、朝鮮を支配下におくことはできないとしている点である。冒頭で紹介した報告書における新渡戸批判にも表れているが、この点からみれば、朝鮮がすでに「死せる」国・「亡国」であると見なすことは、重要な意味を帯びざるを得ない。つまり、すでに「死せる」国・「亡国」である朝鮮に深く関与していくことは、「君子国」日本として当然為すべき正義である、という論理が成立するからだ。そしてそのような論理は、同じ論説のすぐ後に出てくる。

> 余輩は韓国併呑論と云ふが如き、野心勃々たる説は有せざるも、彼の国にして其土地の利用法を知らず、又其国民に対し堵に安んじて業に就き得るの条件をも与ふること能はざるが如きものなりせば、朝鮮のため、又世界のため、我国が之れを世話するは、自然の趨勢にして、且つ又不道徳とも言ふを得ざるべし（略）

このように、新渡戸にとって、自ら経営する能力を欠いた「亡国」としての朝鮮という物語は、大変重要なことでありえた。そしてそれは、かれが朝鮮「亡国」を欲望することもありうることを示している――ここで言う欲望とは、朝鮮を「亡国」として認識したがる欲望のことである――。それによって同時に紡ぎ出されるのは、言うまでもなく「朝鮮のため、又世界のため」に、朝鮮を「世話する」役割を担うべき「君子国」日本の物語である。そして、すでに確認した通り、実際に新渡戸は、朝鮮に行く前に、自分の感覚を動員することなしに、朝鮮を「死せる」国と規定した

わけであり、朝鮮を旅行した時は、おそらく欧米の誰も書かなかったと思われる（洗練された）亡国論を書いたのである。言うなれば、かれの朝鮮旅行は朝鮮が「亡国」であることを発見した旅行というより、すでに自分が「亡国」として見なした（＝欲した）朝鮮の「亡国」たるゆえんを探し求める旅行だったのである。そして、「死せる」国・「亡国」への欲望は、ついに、朝鮮の「死の習風」――それは新渡戸にあっては、象徴的な意味さえ担わされている――を〈発見〉させずにはおかなかったようだ。

次に挙げるのは、「枯死国朝鮮」である。新渡戸はこの短いエッセイの冒頭で朝鮮人を「有史前期に属する」民と規定した上で、「死の習風」について、次のように述べる。

予は信ずらく、此国に於けるが如くに、生者と死者としかく近接して、行動労作するものは無しと。山野は実に墳墓に充つ、予の今過ぐる所の路傍にも、土饅頭を列ねて、又たやがて埋葬せらるべき柩をも列ぬ。其の多くは既に腐敗して、中なるものは露出せり。されど此所を過ぎりて、ヨリックの頭骨に暫し沈思するのハムレットあるを見ず。（略）

唯だ死者と過去との常住の紀念の下には、粗野なる農夫の徘徊し、労作し、休憩するあるのみ。（略）彼等は墳墓の上に踞して、中食を取り、児童は其側に戯れ、彼等の飼へる牛は爰に草を食み、名も無き祖先の晒れかうべは、路傍に行人の蹴る所となる。

（略）祖先の遺骸の蔑視せられて、日常目に馴るゝ物となり、腐敗しつゝある屍体の嗅覚を苦しめ、犬が人間の骨を弄ぶに至らば、死なるものは、あまりに現実、あまりに物質的の事実となりて、之が精神的感化は其の力を失ひ、死は却つて精神上の重荷となり、圧抑し（略）。かく死と密接せる国民は、自から既に半ば以上死せるもの

なり。

「韓人生活の習風は、死の習風なり。彼等は民族的生活の期限を了りつゝあり。彼等が国民的生活の進路は殆ど過ぎたり。死は乃ち此半島を支配す。」長い引用になってしまったが、まず確認しておくべきことは、すでに触れたように、朝鮮には「形式」的であれ、「恐怖」に基づく「信仰」としてであれ、「祖先崇拝」があったということである。当時の朝鮮で「祖先の遺骸の蔑視」はまず考えられず、言うなれば、ここに挙げられたような死者の問題と祖先の問題は別の次元に属するのである。後述するように、新渡戸の言っていることは全く根拠のない話ではない。ここで指摘しておきたいのは、新渡戸が、社会に遍在する風習を全体に一般化して述べたこと、その風習の社会的な意味を考えようとはしなかったこと、しかも、それを朝鮮という国の「死」に結びつけてしまったことである。おそらくそれが「亡国」への欲望の現れなのであろう。すでに朝鮮を「死せる」国と断定した新渡戸にとって、朝鮮の「死の習風」は実に都合のいい〈発見〉であり、従って、それ以上の社会的な意味を探求することは全く無用なことなのだ。この点を強調した上で、当時の朝鮮の葬法について確認をしておきたい。

三　朝鮮の葬法と死体の露出

新渡戸が「死の習風」と呼び、記述した死体にかかわる描写は、どこからどこまでが真実なのであろうか。それをはっきりさせることは、新渡戸研究において有意義であろう。

この頃の朝鮮の死体処理法は土葬が主流であったが、その詳細は複雑のようである。まず、腐敗した死体が目撃さ

れることがあり得ることを示す文化的習慣を、崔吉城の『韓国民間信仰の研究』[33]の記述に拠りながら紹介する。第一に「洗骨葬」というものがある。洗骨葬とは、骨を洗って――または拭いて――埋葬することを意味し、どんな形であれ、一度葬った後にその腐った死体の骨を洗い再び葬るために、洗骨葬は「二重葬」となる。洗骨葬の分布は環太平洋地域で、朝鮮でも行われていた。朝鮮では（仮）埋葬または草墳（藁・草などで覆い、封墳のような形にする）をした後に、骨を洗って埋葬する。第二に、オーソドックスな葬法ではないが、「異例」として、洗骨葬と似たような方法がとられることもあった。「埋葬が困難な時（例えば、土が凍っていて掘りにくい冬）に、死体を仮埋葬するか風葬のようにする場合」、または、「風水（信仰）上、適当な埋葬地が見つからなかったり、何らかの事情によって埋葬地の選定に時間がかかる場合」などである。第三に、「悪疾による死体」を木の枝にかけておく特殊な葬法である。

このように見てくると、こういったいくつかの葬法が朝鮮社会の一つの断面にすぎないとは言っても、広く存在した可能性が浮かび上がってくる。木の枝の上に死体をかけておく葬法や「風葬」のような葬法だけでなく、草墳や仮埋葬の場合も、時間の経過と共に死体が露出する可能性があったであろう。

新渡戸より数年後になるが、ジャーナリストで後に政治家となる山道襄一も天然痘による死亡者の「仮葬」について書いている。[34]まず山道は、朝鮮における二つの迷信を紹介する。①「天然痘によりて死亡したるものは数日乃至数十日後に於て蘇生することある可し、故に死後直に埋葬す可らざること」、②「天然痘によりて死亡するものは前世罪業の因果なるが故に之れを日光に晒らさば本人罪業消滅の功徳となり来世の幸福多く然らすして直に埋葬すれば伝染するの恐れあること」。山道は、「草蓆に包み縄を以てこれを樹枝に吊す」ような風習が行われたり、一定の高い地位にある人たちの葬礼を「三ヶ月を経過して行」い、その間「死屍を温突又は園中に仮葬」したりする風習は、このよう

な「迷信」によるものであると述べる。

こうしてみれば、朝鮮社会で死体、または人骨に出会う機会が多々あったことは事実であり、新渡戸が書き記した光景も基本的には虚構ではなかったと言わなければならない。だが、その現象の根底には土葬の習慣があり、それは様々な社会的・文化的な意味に満ちた営みであった。前述したように、新渡戸はそれらの意味を誤解したのではない。むしろ理解すること自体が不要であるだけでなく、不都合でさえあったと考えられる。

最後に、朝鮮社会の死体について欧米の人々がどのように書き記したかをみる必要がある。それらの死体は、はたして朝鮮という国の「死」をかれらにイメージさせたであろうか。

墓は、特に冬季にはしばしば、大変浅く掘る。私が朝鮮で目撃したもっとも奇怪な光景のうちの一つは、ほとんど地上に露出した死体の足を犬が食う姿であった。春の解氷によって封墳の形はなくなり、死体は外に露出する。犬がたらふく食ってその場を去るまで、烏はわずか数フィートの距離のところに止まって待っていた。[35]

岩下の林の近くで、藁を巻いた丸太が何本も木の枝に縛りつけてあった。これは、実際は男の赤ちゃんたちの遺骸だった。町に近付くと、岩山の麓の藁の小山の下には、大人たちの遺骸が横たわっていた。さらに行くと、道路のすぐ脇に死者の両足が露出していた。死者は蔽っていた藁が膝の処まで引き剝がされていたのだ。空気は腐乱した遺骸の悪臭で充満していたが、住民たちは、住居が遺骸から三〇――四〇サージェンと離れていないのに、異臭を全く意に介していなかった。死者は普通の場合、死後数ヶ月経ってから葬る。金持ちは遺骸を棺に納めて、すっぽり粘土で塗り固めた特別室に埋葬まで安置する。（略）

貧乏人の場合は、死者の遺骸を藁筵に包んで埋葬の時まで家の近辺に、多くは畑の近くに安置する。そこでは、

犬どもが遺骸を食い散らすこともある。[36]

ここに記述された光景は、おそらく新渡戸が見た光景の一部とかなり重なるものだったであろう。かれらには、新渡戸においてよりも朝鮮が奇怪に見え、野蛮に見えたかも知れない。だが、仮にそうだとしても、かれらは朝鮮を「亡国」として表象するどころか、客観的で穏やかな描写にとどまっている。

むすびに

朝鮮を罵倒したり、「亡国」として表象した日本人と欧米の人々のこの違いは、いったい何を意味するのか。朝鮮が自分たちの社会と比べていかに異質であるか、またはいかに「野蛮」であるかを感じたり書いたりすることは、そこに作為がない限りにおいて自然さを認めることはできる。だがまず、日本人の描く朝鮮・朝鮮人は特別に悲劇的であり、その延長線上で「亡国」としての朝鮮、「亡国の民」としての朝鮮人が表象されたことは特記に値する。では、新渡戸をはじめとする日本人の亡国論者たちは、なぜ朝鮮を「死せる」国・「亡国」として見、またなぜ亡国論を書いたのか。それはもちろん、朝鮮で日本の力が拡大した当時の時代状況と関係している。端的に言うならば、朝鮮を「亡国」として認識しようとする欲望の介在が考えられる。それは同時に、朝鮮支配を正当化する論理であったことからすれば、朝鮮そのものへの帝国主義的な欲望とも多分に重なるものであっただろう。朝鮮の随所に「死せる」国・「亡国」としての要素が見出されるのは、当の朝鮮がそうあるからというより――または、そうあるためばかりでなく――、

それ以上に、そうあることを探し求める欲望のためなのだ。朝鮮の状況は、欲望に接収されてはじめて亡国論として結実する。その欲望こそが、日本人にあって欧米の人々になかったものである。[37]

以上が朝鮮亡国論に共通する問題だとするならば、新渡戸の特異さについては次のように説明できよう。欧米の朝鮮旅行者たちは穏やかで洗練された文化批評の態度を維持していた。客観的な態度をとろうとはしなかったものの、朝鮮を罵倒する代わりに同情を示し、涙を流して見せた新渡戸の態度は、欧米の朝鮮旅行記に見られる穏やかで洗練された文化批評の態度に近いとも言える。言い換えれば、その点に日本の亡国論一般――そして、日本の朝鮮論一般――との距離が認められる。

しかしその実、新渡戸の文章こそ、本格的な朝鮮亡国論であったと見なければならない。日本人の亡国論一般が朝鮮を「亡国」として認識しようとする欲望に起因するものであり、それが作為的であると考えられる根拠は、欧米の朝鮮旅行記との対比を通して導き出せるにすぎない。だが、新渡戸の場合はそれに加えて、思想構造を通してその根拠を提示することができる。かれは亡国としての朝鮮を欲し、現に旅行する前から朝鮮を「死せる」国と規定していたのであり、かれの朝鮮旅行は、後付のように朝鮮の亡国のしるしを探し求めた旅行であった。そのあげくに「死の習風」、「死」によって「支配」される朝鮮が、象徴的に描き出されたのである。新渡戸の場合をもっとも本格的な朝鮮亡国論と見なし、その作為性を批判するゆえんである。

最後に、この問題にかかわる新渡戸研究の展望を述べたい。先に挙げた「日本帝国の膨張」において、新渡戸は「朝鮮併呑論」を主張するつもりはないとことわりつつ、自ら経営する能力のない朝鮮を、「朝鮮のため、又世界のため」に日本が「世話する」のは「自然の趨勢」であり、「不道徳」にも当たらないと述べた。この点から見て、新渡戸が朝

鮮を日本領土内に組み込んで統治すべきだとする立場であったとは、現段階では言いがたい。しかし、「世話」の意味するところは、朝鮮の政治・経済・社会に深く関与することであり、「保護」・制限をも意味すると考えられる。彼の言いぐさからも窺われるように、それは「朝鮮併呑論」や「不道徳」な国家行為との区別が紛らわしいくらいに、日本の政治的利害と密接に関係するものであった。

要するに、あえて厳密に区分するならば、新渡戸の場合、「領土」の拡張による帝国の拡大というより、「世話する」水準での朝鮮経営を主張していたと見るべきだと思われる。今後問わなければならないのは、「世話」という考え方とその実際的な意味であり、「世話」の「統治」への転換可能性の問題である。[38] それを通して、本稿で明らかにした新渡戸の「亡国」朝鮮に対する欲望を、具体的な政治的リアリティにおいて把握することができよう。

注

(1) ツベスタン・トドロフ著、及川馥ほか訳『他者の記号学――アメリカ大陸の征服』法政大学出版局、一九八六年)。

(2) 同右書、一四五頁。

(3) エドワード・w・サイード著、大橋洋一訳『文化と帝国主義1』(みすず書房、一九九八年)三〜四頁。

(4) 旗田巍『日本人の朝鮮観』(勁草書房、一九六九年)、「日本人の朝鮮観」を参照。趙景達「近代日本における朝鮮蔑視観の形成と朝鮮人の対応」、三宅明正・山田賢編著『歴史の中の差別――「三国人」問題とは何か』(日本経済評論社、二〇〇一年)。南富鎮『近代日本と朝鮮人像の形成』(勉誠社、二〇〇二年)、第一章を参照。

(5) 新渡戸稲造「亡国」(A Decaying Nation. *Suigen, Korea. October, 1906.*)、『随想録』(丁未出版社、一九〇七年)、『新渡戸稲造全集』(教文館、一九六九年〜一九八七年)五巻、七八〜七九頁。桜井鴎村による和訳文を筆者の新渡戸が閲読加筆して成ったのが『随想録』である(田中慎一「新渡戸稲造について」、『北大百年史編集ニュース』第九号、一九七九年六月、八頁)。翻訳されたとは言っ

ても、そのまま新渡戸の文章として検討されるべきであろう。

(6) 新渡戸稲造「枯死国朝鮮」(Primitive Life and Presiding Death in Korea. *Zenshu. November, 1906.*)、前掲新渡戸『随想録』八〇〜八二頁。

(7) 琴秉洞「解説　第四巻　併合条約締結期 ― 併合期の朝鮮認識」、『資料　雑誌にみる近代日本の朝鮮認識』(緑蔭書房一九九九年)四巻、二六頁。以下、『資料』とのみ記す。

(8) 前掲田中「新渡戸稲造について」、一四頁。

(9) 北海道大学文学部古河講堂「旧標本庫」人骨問題調査委員会「古河講堂「旧標本庫」人骨問題報告書」(一九九七年七月)、一三八頁。

(10) 筆者は、昭和の戦争期の知識人の問題を扱った論文の中で、積極的な「戦争協力」が単純な「屈服」というより、すでに種々の条件によって決定づけられた主体・思想による、いわば主体的な協力と考えられる場合があるとし、それは単なる生活問題や一身の安全のための協力とは区別されるものであったにもかかわらず、そこに区別を設けては「戦争責任」の追究が困難になるというアポリアがあったことを指摘した。拙稿「帝国主義と「ヒューマニズム」――プロレタリア文学作家を中心に――」(『思想』八八二号、一九九七年一二月)一三八〜一三九頁。朝鮮認識をめぐってもこれに似た問題があるというのが、本稿における筆者の基本的な立場である。

(11) 新渡戸稲造の場合を除けば、亡国論はまとまったものというより断片的で、その数も決して多いわけではない。

(12) 十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、欧米の人々によって多くの朝鮮論が書かれた。日本人の朝鮮論の質を見極めるために、それらを参照するのは有効である。本稿で欧米の場合の文献として用い、また目を通したのは、韓国語に訳されている〈『韓末外国人記録』〉全二四巻のシリーズと、日本で翻訳・刊行された三つの著作である。これで十分だと言い切ることはできないが、それは、私が目を通した日本の文献の量と比べても、大差のないものである。本稿で欧米の人々の亡国論というべきものの有無を言うときは、以上のような範囲においてであることをことわっておく。

(13) 末永純一郎「朝鮮の現制竝日本との関係」、『東邦叢書　朝鮮彙報』(東邦協会、一八九三年)、一二一〜一二六頁。

(14) 日露戦争直前の例として、駒田旭江編『朝鮮半島豪傑旅行』(又間精華堂、一九〇三年)では、朝鮮人は「地下に永き眠を取つてゐ

る亡き魂の迎をする祭式」において、「一年一度の遊楽として仏をだしに使つて国民的遊戯をする」とし、「必竟文明の程度の低いのと、一国知識の発達が至らないのに帰するのであらう、所謂半亡国たるの所以も此辺の推理で黙契する事ができる」と述べている（九九～一〇〇頁）。「所謂半亡国」という表現から、日露戦争前の朝鮮認識において「半亡国」という言葉が珍しいものでなかったことが推測されよう。

(15) 三枝生「韓国下等之民情」、『朝鮮之実業』一九〇五年八月二十日、『資料』一巻、四三三～四三四頁。

(16) 「朝鮮奇風」、『韓国写真帖　写真画報臨時増刊第二五巻』一九〇五年六月二十日、『資料』一巻、三九九頁。　増田荒東「渡韓雑記」（三）、『実業之日本』一九〇五年七月一日、『資料』一巻、四一三頁。

(17) 前掲増田「渡韓雑記」、四一三頁。

(18) A. H. Savage-Landor, *Corea or Cho-sen: The Land of the Morning Calm*, William Heinemann Co, London, 1895.（申福龍・張又永訳『静かなる朝の国、朝鮮』（韓末外国人記録十九巻）ジンムンダン、一九九九年【韓国語】）一四一頁。引用文では、早婚した男女が思春期に至るまで共に暮らさないとされているが、それは早婚という慣習全体における規範ではない。早婚の一つの形態として、ミンミョヌリ（漢語では「予婦」と言う）の慣習がある。これは、少女が早い時期に嫁ぎ先へ行き、そこで数年を過ごした後に正式の夫婦となる慣習である。ランドアーが言ったのは、この慣習による早婚であったように思われる。

(19) イザベラ・バード著、朴尚得訳『朝鮮奥地紀行1』（東洋文庫、一九九三年）、一八九～一九〇頁。なお、原著の刊行は一八九八年である。

(20) 和田義睦（講演）「韓国に対する管見」、『新人』一九〇五年十月、『資料』一巻、四六八～四七一頁。

(21) 薄田斬雲・鳥越静岐共著『朝鮮漫画』（日韓書房、一九〇九年）（『復刻版　韓国併合史研究資料』一八巻、龍渓書舎、一九九六年）では「温突生活は蟄居生活にして進取の気象を消磨せしむる害毒だ。穴に蟄するが如きの安易を貪るは、堕落頽化の原因だ」と述べられている（七頁）。一方、朝鮮の韓興教（医師で、のちに独立運動家となる）は、オンドルの「利」と「害」について述べたが、「利」としては、健康上の利、気候上の必要性、経済性などを挙げ、「害」として、衛生上の問題、無分別な木の伐採による「山林」の被害、そして人間の「怠慢性」を挙げていた（「我国温突の利害」、『大韓興学報』一九〇九年五月【韓国語】）。これは韓興教の日本留学時の文章であり、当時の朝鮮の置かれた状況からみても、彼が日本人の朝鮮観およびオンドル観、そしてそこに潜むものさしから完全に

自由ではあり得なかったであろう。

(22) H. N. Allen, *Things Korean: A Collection of Sketches and Anecdotes, Missionary and Diplomatic*, Fleming H. Revel Co., New York, 1908. 申福龍訳『朝鮮見聞記』（ジンムンダン、一九九九年）（韓末外国人記録四巻）【韓国語】、六四頁。原著の刊行は、一九〇八年である。

(23) 前掲イザベラ・バード『朝鮮奥地紀行1』、一三五、二五五頁。

(24) ゲ・デ・チャガイ編、井上紘一訳『朝鮮旅行記』（東洋文庫、一九九二年）二八六頁。引用部分は、「一八九五～一八九六年の南朝鮮旅行」。

(25) 鶏林樵夫「朝鮮風俗」、『活動の日本』一九〇五年一月一日、『資料』一巻、三〇七頁。

(26) 李光洙「教育家諸氏へ」、『毎日申報』（一九一六年十一月二六日～十二月十三日）、『李光洙全集』一七巻（三中堂、一九六二年）【韓国語】、六六頁。

(27) 前掲イザベラ・バード『朝鮮奥地紀行1』、一〇七～一〇八頁。ここで言う「行幸」は、『朝鮮半島豪傑旅行』（前掲）で、「一年一度の遊楽として仏をだしに使つて国民的遊戯」が行われると記述された行為のことであろう。

(28) 「亡国の民」（時事評論）、『太陽』一九〇七年九月一日、『資料』二巻、二七五～二七六頁。

(29) 韓承美（岡田尚央子訳）「日本人の眼を通した朝鮮――明治後期の朝鮮旅行記の分析――」、小島康敬・M・W・スティール編『鏡のなかの日本と韓国』（ペリカン社、二〇〇二年）、九四頁。

(30) 新渡戸稲造「戦後の事業」（一九〇五年五月執筆）、『随想録』（丁未出版社、一九〇七年）。『新渡戸稲造全集』五巻、六六頁。

(31) 新渡戸稲造「桃太郎の昔噺」、前掲『随想録』一八六～一九六頁。さらに、一九一〇年代に入ってからのもので、「軍国を以て終始せざれ」、「領土拡張の経済的基礎」（上・下）も参考になる。――『随感録』（子文社、一九一三年）、『新渡戸稲造全集』五巻、二九六～二九七頁。

(32) 新渡戸稲造「日本帝国の膨張」、「太陽」一九〇四年十二月一日、『資料』一巻、二八二～二八九頁。

(33) 崔吉城『韓国民間信仰の研究』（啓明大学校出版部、一九八九年）【韓国語】、三五五～三六八頁。

(34) 山道襄一『朝鮮半島』（日韓書房、一九一一年）、二一九～二二〇頁。本論文で引用した「後編」は、朝鮮総督府の嘱託を受けて行っ

た調査結果をまとめたものである。なお、本書の「前編」は『大韓日報』の主筆だった頃からの考えを述べたものだと言う（「例言」）。

(35) Rev. George W. Gilmore, A. M., *Korea from its Capital: with a Chapter on Misson*, Presbyterian Bodrd of Publcation and Sabbath-School Work, Philadelphia, 1892（申福龍訳『ソウル風物誌』（ジンムンダン、一九九九年）（韓末外国人記録１七巻）【韓国語】、一三八～一三九頁。

(36) 前掲ゲ・デ・チャガイ『朝鮮旅行記』、二三八～二三九頁。

(37) 日本人が書いたものでも、官による調査報告書はその性格が異なり、認識の上での欲望の介在が比較的に少ないと考える。

(38) 田中慎一「新渡戸稲造の植民地朝鮮観」（『北大百年史編集ニュース』第一一号、一九八〇年一一月）は、新渡戸が併合前から朝鮮への日本人の植民を伊藤に進言していたこと、その後の植民事業の柱となる東洋拓殖株式会社の設立にかかわったこと、日韓併合に際して、「威風堂々たる朝鮮併合肯定論」、「日本民族進出論・日本植民地拡大論・日本「大国」＝帝国発展論」を述べたことなどを指摘した。